

[研究ノート]

藤代禎輔の業績再評価について（結）

中 島 正 道

1) はじめに—本誌前号の中間報告への「結」の意図

前号の鈴木レポート（53～57頁）は、藤代禎輔の遺作『独訳万葉集第五巻鈔』の中で、ドイツ人であるフローレンツ教授に対する、古代日本語解説を藤代禎輔が執筆した部分（53頁右半分～54頁）を例示している。次に55頁右半分上から2行目より、万葉集第五巻の最終部分「男子、名古日（をのこ、なはふるひ）を恋ひし長歌一首」を、『新日本古典文学大系（第1巻）』岩波書店刊行1999年より引用している。山上憶良の作とされ、多くの万葉集研究者が近年において、万葉集全20巻中の最高の作品と見なすようになっている。藤代が、1920年ドイツにおけるフローレンツの助力を受ける独訳再現作業の対象として、萬葉集第五巻を選ぶ際に、その理由として第五巻が最も自分の嗜好に合っていること、および独訳も割合にうまくいったことだ、と『鵝筆余滴』の中で述べているのは、近年の万葉集研究者の動向を、ある意味で先取りしているとも言えるだろう。鈴木レポートもまた同様であり、藤代・フローレンツの独語

訳は、鈴木レポートの55頁右半分下から11行目より56頁左半分全行までに収載されている。

さらに、鈴木レポートは、上記の鈴木フローレンツの独語訳からの現代日本語への逐語訳（もちろん鈴木邦武先生訳）を収録しているのである。（前号、56頁左半分最下行から同頁右半分下から6行目までに収載されている。）なお、この長歌1首と反歌2首に付されている904、905、906の数字は、旧国歌大観番号と思われる。

2) リービ英雄の万葉集英語訳について

リービ英雄は、1950年アメリカ生まれ。1967年始めて日本に移住。母語は英語であるが、青年期はアメリカ・日本両国の各地で生活した。その間プリンストン大学（アメリカ東部ニュージャージー州にある名門大学）の大学院博士課程を修了。1982年万葉集の英語訳 IAN HIDEO LEVY, “The Ten Thousand Leaves: A Translation of the Man'yōshū, Japan's Premier Anthology of Classical Poetry”により全米図書賞を受賞。

この本は、万葉集全20巻のうち巻1～巻5までの翻訳で、プリンストン大学出版会と東京大学出版会の共同出版であった。表紙にはVOLUME ONEと印刷されていたが、今日(2015年)まで、万葉集巻6～巻20までの翻訳続刊は出版されていない。

リービ英雄(以下「リービ」と略称することがある)は、2004年に『英語でよむ万葉集』(岩波新書・新赤版920)岩波書店を日本語の作品として公刊した。上掲の英語訳万葉集(巻1～巻5)の訳者リービ英雄が翻訳作業中に何を感じていたか。この新書の冒頭でリービは、分り易い日本語で書いた「世界文学としての、万葉集」という文章をこの新書の冒頭で示している。若い世代の日本人と教育に携わる人々にとって必読の文章であると思う。その中のごく一部分を以下に引く。

「万葉集は、昨日書かれたかのように、『新しい』ことばの表現として、ぼくの目に入った。(中略)源氏物語以上に、松尾芭蕉の俳句以上に、ぼくに最高の感動を与えてくれた日本文学は万葉集だった。(中略)日本だけではなく、世界の古代文学のなかで、これだけのスケールの大きさと、多様な表現からなる抒情詩集は、はたして他にあったのか、と考えるようになった。(中略)もしかしたら世界にも例をみない、詩歌の集大成なのではないか」、「世界文学としての、万葉集」(i～ii頁より抄出)。この「世界文学としての、万葉集」の文体はエッセイであり、『英語でよむ万葉集』の中での位置は序である。筆者としてはこれを「序詩」と呼んでおきたい。

この文章を、藤代禎輔がもし目にしたら、強く共鳴したに違いないと筆者は思うのである。

日本語の新書『英語でよむ万葉集』は、英語訳『The Ten Thousand Leaves』中から約50首を選び出して解説したものである。万葉集からの各首読みおろし原文とその日英両現代語による対訳とを掲げ、併せてリービは翻訳に際しての苦心や感銘を綴っている。章構成は、序章および1章～9章の全10章となっている。「9章山上憶良、絶叫の挽歌」(終章187頁～215頁)は、リービ英雄の最も力をこめた、この本の焦点であり、万葉集巻5の最終部分の長歌1反歌2首のうち904、905を採り上げて、カー一杯全215頁の叙述を終えている。中断のような終わり方で「後書き」は無く、主要参考文献8点が示されている。

序詩「世界文学としての、万葉集」に、新書一冊通読の後に戻るならば、9章はリービ英雄の世界文学探訪へのプロローグとも見ることができる。藤代禎輔遺著『獨訳萬葉集第五卷鈔』も同様の位置づけをしてよいのではないか。藤代の万葉集全訳草稿(フローレンツ教授のドイツへの帰国に際して1914年に呈上した走り書きの草稿)が、文字通りの完全訳ではなかったにしても、相当程度の量と質であるにしても、ドイツ語への万葉集の翻訳は一たんは、短歌についての、ほぼ全訳が遂行されたようだ(藤代の作業は「万葉集20巻のうち19巻を全部訳了」『獨訳萬葉集第五卷鈔』32頁)。

リービ英雄がプリンストン大学大学院で万葉集を読み、英語訳を試み始めたとき日本の万葉集研究の第一人者である中西進教授はプリンストン大学に招聘されていた。リービ英雄にとっては幸運な師弟の出会いであっただろう。フローレンツ教授と東京帝大独文科大学院生になったばかりだった藤代禎輔との出

会いにもいくらか似たところがあった。

3) リービ英雄の万葉集第5巻末尾部分に対する著者(中島から)の英訳修正の試み

リービ英雄の「904末尾：1. 立ち躍り 2. 足すり叫び 3. 伏し仰ぎ 4. 胸打ち嘆き 5. 手に持てる 吾が子飛ばしつ 6. 世間の道」の英語訳には、我々東洋人はいくらかの違和感をもつ。リービ英雄のこの部分の英語訳は驛馬の如くに強く、早く走ろうと絶叫している。原著者山上憶良は悲しみに耐え、苦しみは絶叫し得ずに呻き声を洩らす人々に寄り添おうとしている。私たちがそうありたいと願うが、リービの絶叫は青年詩人としての特権でもあろう。ここでは、戦後日本の新しい万葉集理解の先端に、中西進と相並び立ってきた伊藤博の「歌群」的理解提唱に依りつつ「リービの904英訳」へのほんの数箇所の手直し(案)を示したいと思う。「深部からの呻き声」を筆者には適切な英語で表現する能力はない。しかし、その数箇所だけはリービの激走に影を添える試みが必要だと思う。

(リービの904英訳)

1. In frenzied grief
I leaped and danced,
2. I stamped and screamed,
3. I groveled to the earth
and glared at heaven,
4. I beat my breast and wailed.
5. I have let fly the child
I held in my hands.
6. This is the way of the world !
リービ英雄『英語で読む万葉集』p.209

(中島からの修正試案)

1. In our frenzied grief
←私たちの悲しみ
I leaped up and down
←dancedはトル
2. I stamped and screamed,
3. I groveled to the earth
and looked through up at heaven
←glare(にらみつける)はトル
4. I beat my breast and wailed.
5. We have let fly our child
←横しま風(邪悪な風)に飛ばされた私たちの子
We held in our hands.
6. This is the way of the world !

4) おわりに

筆者の修正案についてご感想ご意見をお寄せください。藤代禎輔存命ならば、リービ英雄の英訳をどう見るだろうか。筆者の修正案をどのように評価するだろうか。筆者の「リービ英雄を高く評価すると共にいくらかの修正も必要とする」立場は修正の巧拙ではなく、修正の必要にいくらか共鳴して頂くこととなり、藤代再評価の原動力となりうるものと思います。なお、文献注は本文中に割り注とさせていただきます。

謝辞

小生の拙い作品を第17号・18号に投稿させて頂くことが可能となったのには、上記

『独訳万葉集第五巻鈔』を購入可能の情報を提供して頂いた農水省図書館職員、その後、藤代禎輔について多角的な情報検索をして頂いた本学図書館司書、さらには臈大な木村正辞文献について丁寧なご教示を賜った千葉県立中央図書館の司書各位のおかげであり、感謝を申し上げます。